



Title	正岡子規の文学：その少年期青年期の文学観念
Author(s)	松岡，満夫
Citation	大阪外国語大学学報. 1973, 29, p. 201-210
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80471
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

正岡子規の文学

その少年期青年期の文学観念

松岡満夫

MATUOKA Michio

The purpose of this paper is to claim that the poetical works of MASAOKA Shiki should best be appreciated by regarding them as constructed upon the basis of the Spirit of 'ga', a term symbolizing the ideal world of elegance and refined beauty in the long tradition of Chinese poetry. It seems that this goal of Chinese poets and their efforts to approach it by bringing themselves as remote as possible from 'zoku' ('worldly, mundane, vulgar, secular') had something congenial to Shiki's personality, but this artistic view of his was all the more fortified with his study of Chinese classical poetry as a young child. It was after he succeeded in finding and expressing harmony between this spirit of *ga* and Haiku poetry that he finally felt confident as a Haiku poet and launched the famous innovative Haiku movement. This was around 1892 and he was 26 years old.

1.

子規は慶応3年(1863)9月17日、伊予松山に、父御馬廻加番正岡隼太、母八重の長男(二男ともいう)として生まれ、明治35年(1902)9月19日、東京下谷上根岸子規庵にて死没、満35才、名は常規、諱は升、幼名は處之助、別号に香雪、獺祭書屋主人、莞爾先生、盗花児、花風病夫、竹の里人等がある。

子規は明治25年(1892)5月「日本新聞」に俳句中心の紀行文「かけはしの記」を載せ、6月同新聞に俳句評論「獺祭書屋俳話」を發表、以後死に至るまで俳句界の指導者として句作、評論に活躍した。このような境涯一、隨筆文学、短歌革新にもすぐれた業績をあげるが—に入った因はそもそも何であったか。

子規は晩年に自撰句集「獺祭書屋俳句帖抄」(明治35年4月15日)を刊行した。彼の俳句控え帖ともいうべき「寒山落木」「俳句稿」の中から自撰したもの、上巻のみで下巻はその死によっ

て発行できなかった。この序文「額祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」に子規の俳句歴が興味深く語られている。それによると子規は、先ず漢詩を作り、次に和歌を詠み、最も後れて俳句に入ったという。しかも、漢詩人、歌人として打って出す、俳人として文学界に現われた。それは何故か。俳文、評論を載せた「日本新聞」と彼との運命的結びつきの物語は除外して、少年期から青年期末までに彼の文学観念がどう展開したかを考えることによって、その因を究明して見よう。

子規は明治5年（6才）父を失う。翌年、寺小屋に通学、また外祖父儒者大原観山に漢文を習う。明治7年（8才）松山市智環小学校に入る。教育程度低きため勝山小学校に転ずる。孟子の素読をする。翌年観山没、その後は土屋久明について漢文の素読を学ぶ。漢学中心の教育は明治時代初期の一般的傾向で、松山の子規の周囲の少年たちはいうまでもなく、子規と同じく慶応3年生れの、幸田露伴、尾崎紅葉、夏目漱石ら皆例外ではなかった。が子規はその中でも、漢学へ異常なほど執着した。明治11年（12才）土屋久明の指導で漢詩を作りはじめ、毎日1首づつ詠んだ。但し今は「漢詩稿」に、次の五言絶句一つ残るのみ、

聞 子 規 余作詩以是為始

一 声 孤 月 下 啼 血 不 堪 聞

半 夜 空 欹 枕 古 郷 万 里 雲

明治12年に七言絶句2がある。以上3首が小学生時代の作で、明治13年松山中学入学後も詩作を廃することなく、「漢詩稿」によれば明治29年まで継続している。その他に全集に「少年時代詩篇」（皇明治13年^{（皇明治16年）}）があり、「七草集」（明治21年）にも漢詩文がある。「漢詩稿」はその時その時の作品を集めたもので、漏れたものもあるが、この1冊では子規の漢詩への志向を知ることができる。次に中学時代とその後の作品数を表で示す。

明治13年	11	明治14年	58
15年	57	16年	66
17年	87	18年	23
19年	26	20年	16
21年	36	22年	21
23年	43	24年	28
25年	39	26年	2
27年	2	28年	34
29年	66	年代不詳	5

小学時代の作も入れて623首である。これだけあれば優に1冊の漢詩集を編み得る。手許に「遠思楼詩鈔」あり、初編2冊の漢詩の数を試みにあたってみると223首であった。子規の友人大谷是空は「^{（1）}明治24年彼れが木蘇旅行をした時作った、岐蘇雜詩30首に至って彼れの詩才詩力は遺憾なく發揮されました。上下平声30韻を順次使用した七言律の堂々たる大作で優に専門詩人の域に達して居ます。国分青厓先生が其中から殊にすぐれたるもの15首を選抜して当時の新聞『日本』に掲載して大に賞揚されましたので彼れの詩名は俄に上りました」と後に回想している。俳

名よりも詩名の方が先に上ったと思われるが、青厓が「岐蘇維詩30首」の中の15首を刪定して「日本」紙上に発表したのである。青厓は明治から昭和にかけての有名な漢詩人であったが、その青厓も「² その時子規が木曾道中の際作ったと云う漢詩を見せて貰ったが、仲々偉い事を言っ
て居って非常に上手い。斯様な人が詩をずっとやったら素晴らしいものになるであろうと私も内
心感心して居ったが、御承知の様にあまり詩は作らないで、俳句の方で名を成した。」と述懐し
ている。しかし子規は漢詩人になる意志を示したことはなかったと思う。漢詩制作は彼の文学に
対する情念を駆り立てる手段であった。

2.

子規の「自笑文章」と題する、明治11、2年の小学時代の和作文を集めたものがある。漢文訓
読調の文体である。

抑犬ハ獸中ノ長ニシテ、人ノ為ス能ハザル所亦能ク之ヲ為ス。(洋犬説—明治11年)と、「今
体名家文抄」(明治10年刊)の

自由交易論ハ何事ヲ論ズル、自由交易ノ国ニ害アルヲ論ズルナリ。(自由交易論—西村茂樹)
と並べて、小学生の作と、大人の作とその差幾何かあると言いたくなる。「無花果艸紙」の

我国ノ自由ハ果シテ何クニアルヤ。余ハ未ダ其何レノ処ニアルヤヲ知ラザルナリ。(自由何ク
ニカル)

も亦同調子の文である。かかる文体を作りつづければ、かかる文体に愛着を感じるは当然である。
子規は少年時代、漢文訓読体の文、或は漢文を最上等の文体と信ずるようになった。明治15年、
竹村鍛の「寒梅説」の上に「文字只百余字耳、而感慨之意備到、可謂文簡而意尽矣、升妄評」と加え
たが、この「簡而意尽矣」こそ子規が漢詩文の修学から得た批評の集約であったのだ。漢詩は特
に愛して儒者河東静溪の添削も受け、前掲「漢詩稿」の詩数表にも見るが如く作品を多く残し、
また自信も持っていた。

冬 曉(明治14年作)

市声未動乱鴉喧。窓紙嫩紅昇曉暎。

夢覚思詩都不記。衾中也復役吟魂。

一読、詩に耽溺している子規が想起される。

漢詩を愛すれば漢詩人たるを欲する筈であるが、彼はむしろ漢学者臭味を帯びて、詩人画師など
男子一生の目的に非ずなどと嘯いていたのだ。「自由何クニアル」と自由党士気取りで経世済民
を夢想していたに過ぎない。明治15年夏、5友の1人三並良が進学のため上京するや、子規は屢
々彼と手紙を往返した。三並宛の子規書簡の一つ(7月31日付封書)に「7月25日発の玉箋同月
31日に相達し謹んで披読するに久保田楼待舟の詩あり曰く終夜海楼待返舟頻飛目処水同天三更人
定無声刻潮勢如雷意凜然とあり余妄に之を改む曰く終夜高楼偏待船倚窓望海水連天三更人定四隣
寂潮勢如雷意凜然となせり」と書き、つづいて「返舟の熟字恐らくは不当か」とか、「又君の如
くせば楼字孤平となる故に余偏待船となせり」とか、縷々として語句の批評をし、熟字の吟味、

平仄の正鵠や否やに触れて尽きる所がない。今一つの書簡（10月22日付封書）には「嗚呼今日の形勢に当て何の邦何れの地を問はず開港場にして通ぜざるの処なきは英国の語なり英語何ぞ其れ此の如く広きや是れ英書の読まざるべからざる所以なり」といい「嗚呼大なるかな、洋書の功、洋書の功大なるかな噫」といい、さらに「今君の書を得て余甚だ驚駭する所あり且つ奇恠に堪へざるの言あり則ち余を目して漢学に熱心する者となす是れ君の余の漢書に熱心するあるを慮りて此言を発して戒しむるか然れども両三人より通知ありたりとあり則ち君の之を設けし話に非ざるを証するなり嗚呼両三人の余を目する此の如きに至るは其何に原因するか余未だ之を知る能はざるなり万一余にして此の如きの事あらば余は慚愧に堪へざるなり」という。在京の友へ努めて自己弁明を試みている。少年子規の心は、漢詩への傾倒と新時代の学問洋学への志向と二つの間に揺動していた。

かくて明治16年夏上京、須田学舎、共立学校などに通学し、大学予備門への受験準備をする。17年9月予備門入学、所期の目的を果たした。その間わずかに1年であったが子規にとっては一生をかけるほどの苦悶があった。学問として何を選ぶべきか。在郷時代からすでに医者嫌悪し、理科学を蛇蝎視し、強いて目的はと問われれば政治法律と答える位であった。詩を作るより田を作れという明治初期に根づよく蟠っていた実学思想の洗礼を早くから受けていた。しかし上京後も漢詩作はやめられない。「漢詩稿」によれば明治17年の作数が最も多い。

夢中ノ詩（明治17年作）

2月13日風邪劇シク声全ク出デズ、夜半夢驚クノ際雪ノ窓ヲ打ツヲ聞ク、夢カ幻カー聯ヲ得タリ。

打窓声小軟於雨。鋪地色明白似霜。

翌曉眠覚メテ後猶模糊心胸ニアリ

これと、前出の14年作「冬曉」と相比して子規の層一層詩魔に憑かれ行く様が想い浮べられる。

子規は中学時代哲学とか、文学とか、少しも知らなかったと回想している。これは哲学、文学の語が彼の語彙になかったということである。哲学、文学に代わる彼の用語は、学芸、詩、文章などであった。もちろん詩文章は彼の最も愛するもの、しかし政治法律以上の価値を付し得なかった。上京後もしばらくはこのような考え方をしていた。彼の回想によれば18年の春には哲学を目的として誰が何といっても変えまいとまで思い込んだという。教師、友人、読書を通じて哲学の価値を発明したのであろう。当時は哲学がフィロソフィーの訳語としてまだ一般化していなかった。例えば明治19年2月刊中江篤介訳アルフレット、フーイエー著「イストアル、ド、ラ、フィロゾフィー」の訳書名は「理学沿革史」であった。哲学は井上哲次郎らのよく用いた語であった。ともあれ子規はまず哲学を価値あるものと知った。19年秋、学友米山保三郎に訪われてその哲学談話に驚かされ啓発されたこともあった。しかもなお文芸（子規は時々この語も使った）を未技と見る観念は捨て切れなかった。「目的は哲学なり、詩歌は娯楽なり」と揚言していたという。坪内逍遙の「小説神髓」（18年9月—19年4月、9分冊。同5月合本上下2冊）を読んで感動すること大であったが、これは小説論で子規の詩歌観にまでは影響しなかったようだ。回想によると審美学なる学問の存在を知ってはじめて哲学と詩歌が結びつき大いに喜んだという。明治

21年のことであった。哲学に目的を定めて既に3年を経過していた。

いうまでもなく美術論、美学論は明治初年以來先覚たちによりしばしば試みられた。16年11月には中江篤介訳「維氏美学」も印行された。考えれば子規と審美学との出会いは遅すぎる恨がある。勉学中でもあり、余裕のない彼として蓋しやむを得ないことであったろう。

3.

子規と西洋との出会いを重視する向きもあるが、子規の本質を考えるにはあまり役立たない。というのは、子規としては、娯楽としか見られなかった詩歌を人生に有益なものと認識できればそれで済む問題だったのである。「夫れ天下有用の事物は皆人間に快樂を与ふる者なり。而して之を分ちて積極的快樂及び消極的快樂とす。消極的快樂は害を除き痛を去るの謂にして生命財産の安全を保護し飢渴を医し疾病を驅除するが如き皆是れなり。されば一国の政治をはじめ農工商医の職にある無数の人間は尽く社会の為に此消極的快樂を与ふるものに外ならず。之に反して積極的快樂とは直接に人間の身心に向って多少の快樂を与ふる者にして無聊を医し鬱悶を開き更に精神をして爽快の度を増加せしむるの謂なり。而して美術は即ち此効能を有する随一のものとす」の如き子規の典型的文学理論の一つである。ここに積極・消極の対立概念が用いてある。子規はこのように対立概念を用いることが好きで、長篇・短篇、散文・韻文、主観・客観、人事・天然、写実・写生等皆そうであった。この中、写生即ち客観描写が子規文学を支える最重要理念であったことはいうまでもあるまい。私はこれらの語が子規によって哲学的美学的に解釈されたとは思わない。否、再考すれば、これらの用語は文学表現の方法に関するもので、子規文学の本質をはのを見せているに過ぎない。そういう方法論を打ち出す背後にはきっと重要な観念があるにちがいない。それを探し求めて私は「雅」を得た。雅致、雅味、雅懷、雅感など時々表現は異っても一貫するものは「雅」である。そしてその「雅」の観念は少年時代漢詩漢文を中心とした回覧雑誌の名称に「雅懷詩文」「雅感詩文」とつけていることから、かなり早くから萌していたことを知る。子規は文学的情緒を受け取る語として「高尚」「趣味」などもよく用いた。皆「雅」の別表現であると思う。「俗」に対立する概念で、子規を俟つまでもなく明治の文人は雅俗の語をよく用いた。文体にも雅文体あり、俗文体あり、雅俗折衷文体という風に、反語的に言えばむしろあまりに通俗化した語であったといえる。しかし、子規にとってはこの雅観念—それは漢詩によって養われたものであるが—こそ彼の文学の発展に欠くべからざるものであった。

仙人的思想

余は国にある時は竹村、安長など皆詩画の友なりければ、出会ひし時の話も皆仙人流の事のみなりき。ある時安長松南わが家に來り画などかきし折から、後來學校を卒へなば共に閑居せんとの計畫をなし、余は其デザインをなし松南に画かしめしが、其画今はなかるべし。其趣向は正面の山間より滝落ち、其水は淵をなし潭をなして流る。其岸にある岩石の間に一軒の水亭を立て、其中に在て詩を賦し水を聴きるものは即ち我なりしなり。(明治17年作)

仙人的思想、即ち雅的、趣味的思想を回想にことよせて歌い上げている。青年期に入っても子規

はこの趣味を固く持っていた。

八 犬 伝

余八犬伝を好む。始めの方にては富山の段最も気に入ったり。あの筆力といひ、あの風致といひ、高尚なる趣向にして簡雅なる文句を用ふ。伏姫の零落、已に一段の雅味あり。而して之を助くるに牛背の牧童を以てす。真に仙境の思ひあり。浄瑠璃にても此段を聞く時は覺えず笑顔なすを常とす。(明治18年作)

ここにいう風雅、高尚、簡雅、雅味、仙境の思いなどは日頃から子規愛好の語で皆同意味であったと思う。もちろん漢詩に於て求めていた趣味である。「八犬伝」が早くから彼の愛読書であったのは、こういう場面への共感があったからで、この文はそれをありのままに告白しただけである。ところが突然子規は俳句制作にこの「雅」の趣味を求めようとしはじめた。子規は「獺祭書屋俳句帖抄上巻」の序に「俳句は其頃(少年時代の後期を指す)少しも見た事もなければ作った事もなかった」と書いているが、「八犬伝」を愛読していたとすれば、第壹輯の挿絵に俳句も彫り込んであるのだから見ないことはなかろうと思う。風の如く心を吹きぬけていたのであろう。とにかく彼は「それでも普通の俗人が花見に行くとか何か一句ひねくるやうなわけで、自分も何とはなしに17字を連ねて見たのは明治18年の事であった」と言った。この年は前述の如く哲学を一生の目的と決意した年であった—それは決意だけに終わったけれども。しかし一方、詩歌の価値づけについてはまだ暗中模索の状態であった。従って漢詩の制作も17年までに比較すると急に少くなる。(「漢詩稿」詩数表参照)。怠り勝ちになったのだろうか。いきおい自己の本質が要求する「雅」趣味を他の詩形に托して見たくもなろう。俳句だけでなく、すでに試みたことのある和歌へ、もう一度足を踏み入れようとした。即ち18年夏帰省中、井手真棹について和歌を問うているのである。しかし「竹の里歌」を見るに18年から3年間、和歌は1首もない。21年に俄かに増して63首ある。そして22年が6首でこれまた激減している。これは何を物語るのだろうか。

俳句は、「寒山落木」によると、18年—7句、19年—1句、20年—23句、21年—31句という風に、以後は年々増加して行った。これまた何を物語るのだろうか。

4.

子規が哲学、詩歌の二途に迷って苦悶していたことは前に述べた。その解決が21年で、その時の心のよこぎりが、この年和歌を多く作らせたと考えられる。もちろん漢詩、俳句いずれも前年より多く作っている。しかし和歌だけが22年になって激減した。

それは子規もいうが如く「和歌は入り易くして至り難し」で、和歌の調べに自分の愛する「雅」趣味をどうしても乗せ切れなかったのであろう。勿論和歌作りを廃したのではない。「雅」と調べといつかは結びつくことを期待しつつ和歌も作りつつづけている。要するに時を待たねばならなかった。

俳句は「入り難くして至り易し」で、それだけに句数も年々多くなって行った。最もおくれて入った道が最も気に入ってくる。漢詩によって培って来た趣味観念は、仮名17字の最短詩形によ

って最も的確に表出される、子規はそうのように感じとった。

「漢詩、漢文の持つ雅致は漢字の特種性に在る。即ち漢字は意字で一字づつ一意味をあらわすから、例えば『柳古而禿』の如き取るに足らぬ句でも只4字で意を尽しており、従って字面を見ただけで面白く感じられる」と子規はいうのである。

子規は冗長を極度に嫌悪する。「最简单的文章が最良である」とまで極言する。最简单的の代表的なものが俳句であり、従って彼は必然的に俳句制作へ傾斜して行った。明治22年から23年までの彼の考えと実践はこのようであった。しかしこの考え方には陥穽がある。簡単なる語句に余意を含める、即ち言外の意味を求める、意味深長を願う、語文を簡単にすればする程そのような要求が生じがちである。もちろん子規は意味深長も解し得る範囲内で求めるべきであると反省をしている。例えば芭蕉の俳句を解釈するに、芭蕉も考え及ばないような意味を付けてする「大鏡」流儀は正しくないとやっている。子規のかく言う、その限りでは正しいと思われるが、言外に深い意味を求める心も切であった。碧梧桐宛（23年5月封書）の書簡に

惣じて文学といふもの殊に詩歌発句の類は成るべく少き言葉にて成るべく多くの意味を現すや
つが面白きなり漢語にて含蓄とか意在言外とかいふも即ちこれに御座候李白の間余何意棲碧山
云々の詩や芭蕉翁の古池の吟などの面白きと申すも畢竟含蓄の多くして言外に無限の味ある故
也もし面白いのを面白いといひさみしいのをさみしいといはゞ何の妙味かこれあらん（中略）
発句は巧者にいはずともありのまゝをいふがよき也抔といふは未だ俳諧の真味を心得たる者には
無御座候

とあるのは、この時期の子規の心を端的に表わしていると思うが、俳句に和歌に文章に写生趣味をおし拡げて行った子規も、この時はこのような俗趣味に墮していた。後輩の碧梧桐に対して

麦の葉や暦の末の二三寸

鶯の影たゝみこむ屏風哉

の如きを挙げ、優れた句として得々と解説しているのである。

子規は少年時代から煙霞の癖があったという。自然を愛するはあながち子規独りの特色でもあるまいが、彼のそれは漢学、漢詩から来る⁹⁾文人趣味に原因しているという。それについては彼の文「仙人的思想」をあげて示しておいた。上京してからも幽雅な山水を求めて楽しみたいという気持はなくなる。一つには美しい自然にふれてそれを文にし詩歌にしたいという目的があるからであった。青年時代になっても煙霞の癖が益々押え切れなくなる。と同時にそれに伴って文章癖も益々猖獗を極めて来た。子規の「雅」を求める心の当然の成行きだったともいえる。

「筆まかせ」をどことなく1頁だけひろげて文題を拾って見ても「美人の出産地」「童謡」「道德の標準」となかなか変化に富んだ題がある。もちろん彼の好きな旅の記、思い出もこれらの中に点在している。「筆まかせ」の文は青年時代の学問的にもまだ未熟な時代のものであるだけに一つ一つ見れば欠点もあろうが、読者に興を覚えしめるのは無造作に書きためているからである。書くことに文学があると見た子規だった。特に明治21年以後にそれがきわ立って来る。審美学を知ったことによって勇気づけられたためである。もちろん彼は審美学を研究しようとは考えなかった。それは参考にするだけで、とにかく作品を作ることには一生懸命であった。だから漱石に手

紙で「御前の如く朝から晩まで書き続けにては此 idea を養ふ余地なからんかと掛念仕る也勿論書くのが楽なら無理によせと申訳にはあらねど毎日毎晩書て書て書き続けたりとて子供の手習と同じことにて此 original idea が草紙の内から霊現する訳にもあるまじ此 idea を得るの楽は手習にまさること万々ならんこと小生の保証仕る処なり」と戒められる仕儀にもなった。此の漱石の書簡は、漱石伝にもよく引かれ、青年期の彼の思想を知るためのよき資料となっている。松山に帰っていた子規に送ったもので22年12月31日付である。子規が漱石と22年の夏から文学問題について意見を述べ合った書簡を一まとめにして「筆まかせ第2編」に残しておいたのである。漱石の書簡には別紙が付けてあり、その中で文学の問題として idea と rhetoric との関係を分析して rhetoric より idea が重要であると結論したのに対し、子規は「況於文学尤重 rhetoric 乎。況詩文之才。多出於天才乎。雖然僕豈謂天才乎。只自勉發揮我天真。而不必依賴古人之遺書耳。」と答えた。漱石と子規との優劣は問う必要はない。子規は天才論で軽く鋭鋒をかわしたわけであるが、我が天眞を發揮するだけで他を顧みる必要はないという所、如何にも子規らしいとは思ふ。彼がよく言う雅致の觀念も彼の天真から出ているもので説明しがたいものであったろう。

また漱石は同じ書簡に「七草集四日大尽水戸紀行其他の雜録を貴兄の文章と申候文章でなしと仰せらるれば失敬御免可被下候」と言っており、idea, rhetoric 評は多分これを受けて書かれたものと思うが、もしそうであれば、漱石はこれらの文に不満を感じていたと考えられる。「胸中に一点の思想なく只文字のみを弄する輩は勿論いふに足らず思想あるも徒らに章句の末に拘泥して天真爛漫の見るべきなければ人を感動せしむること覺束なからんか」との漱石の言は、それとなく子規の「七草集」等の文にあてられているように思う。「七草集」は21年夏、向島須崎村の月香楼に遊んだ時の文を集めたものである。滞在20数日であるが、漢文、漢詩、和歌、俳句、謡曲の文、漢文訓読体文、和文、とまことに多彩である。一つ一つ読んで子規の器用さに感心するが漱石のいう idea を求めるにはやや不満を覚えざるを得まい。「水戸紀行」22年4月3日から7日まで友人と2人で水戸へ行った時の文。序に、紀行文には種々の文体あることを述べ、水戸紀行文は雅俗折衷体によると断っている。雅俗折衷体とはいえ、江戸時代の滑稽本に倣うている。文中「膝栗毛に鞭たんとは思ひ居ながら」とあるのでも分かるし、友人の名を「吉田の少将多駄次となん呼ぶ」などふざけている。「四日大尽」は22年11月21日から3泊4日、大磯の松林館に病氣静養している友人大谷是空子を訪ねた時の文で、文体は和漢混交で物堅い感じがする。このようにその時々文体を異にしていた。漱石はこれらを読ませてもらって文体よりも idea を養えと子規に忠告した。子規は漱石に小説を書く計画のあることを知らせていたと見え「御前兼て御趣向の小説は已に筆を下したまひしや」と尋ねられ、また「今度は如何なる文体を用ひたまふ御意見なりや」と問ひかけられている。「文体は如何」とは子規に対する皮肉な質問であった。また漱石が櫻庭篁村の小説を痛烈に批判したことも、その頃篁村を熱愛した子規の無思想的傾向への警告でなくて何であろう。これが子規の心底に伝えない筈がない。やがて俳句に含蓄味を求めるようになる。理に落ちる俳句を作るようになる。挙句の果は理に過ぎることを警戒するようにさえる。

子規は23年、24年、25年とこの期間しばらく煩悶をつづけた。その煩悶の中で彼が求めたものは優美、宏壮、高尚の観念であった。それらは少年期以来の彼の持前の「雅」観念の別な表現である。24年春、房総旅行をした時の紀行文に「七浦の波に手を洗ふて独り風雅の骨髄に誇る。あゝ風雅かあゝ風雅か。」とある。風雅の用語注目すべきであろう。和文、漢文、漢詩、俳句、和歌と並べ、終りに英詩を添えている。漢詩、俳句には「雅」観念が伺われるが、和文はまだ洒落気を脱していない。

俳壇登場の第一作「かけはしの記」は24年夏帰省の途中、木曾路を通った時の紀行文である。漢詩「岐蘇雜詩三十首」と共に推敲に推敲を重ねて翌25年に発表した。俳句と漢詩、併わせ作って「雅」の世界に遊ぼうとしている。冒頭の文をあげて見よう。

浮世の病ひ頭に上りては哲学の研究も惑病同源の理を示さず。行脚雲水の望みに心空になりては俗界の草根木皮、画にかいた白雲青山ほどにきかぬもあさまし。腰を屈めての辛苦艱難も世を逃れての自由気儘も固より同じ煩惱の意馬心猿と知らぬが仏の御力を杖にたのみてよろよろと病の足も覚束なく草鞋の緒も結びあへでいそぎ都を立ちいでぬ。

五月雨に菅の笠ぬぐ別れ哉。

青年子規も一俳人として芭蕉を無視できない。この文には芭蕉俳文の面影がある。それにしてもこれまでの紀行文と異り「かけはしの記」には漢詩を入れなかった。その後の紀行文にも漢詩は見られなくなった。全く俳句中心に純化したといえる。そしてその文章も益々芭蕉化した。明治25年10月の箱根、修禪寺を歩いた時の紀行文「旅の旅の旅」から一節を引く。

身は今旅の旅の旅に在りながら風雲の念ひ猶已み難く頻りに道祖神にさわがれて霖雨の晴間をうかがひ草鞋よ脚半よと身をつくるひつゝ一個の袱包を浮世のかたみに担ふて飄然大磯の客舎を出でたる後は天下は股の下杖一本が命なり。

これを読んで芭蕉の「奥の細道」を思い浮かべないものはない。かくまでに俳句どころが固まって来たのも「かけはしの記」「岐蘇雜詩三十首」の作成努力があったからである。ここで俳句と漢詩との「雅」観念がはじめて一つになった。「獺祭書屋俳句帖抄上巻」の序では24年もおそくなって「俳句分類」という研究作業をはじめ、古俳句を歴史的によみたどる中に蕉風に來って大いに悟る所があったと言っている。これも事実である。子規自ら語る所で否定できない。しかし最も大切なことは今まで夢中に作っていた漢詩と俳句が彼の観念の中で一つになったことである。それが子規文学を考えるための本質としてとりあげた「雅」観念である。

俳句と和歌と漢詩と形を異にして趣を同うす。中にも俳句と漢詩と殊に似たる処多きは俳句が力を漢詩に藉りしにもよるべきか。芭蕉は杜甫の詩を読みて其趣味を俳句に移し、蕪村は詩の趣味と共に詩の言葉をも俳句に用ゐたり、然るに漢詩を解する者往々にして俳句を解せざる者あり。こは俳句を見るに漢詩を見るの標準を用ゐざる故なり。（「俳句と漢詩」明治30年2月）

30才になって発表した論で、「増補、獺祭書屋俳話」の中に入れられたが、漢詩を道して俳句を

見る、それは両者「趣を同うす」ることを感得したからであって、いうまでもなくその趣が「雅」であった。子規の和歌革新もこの「雅」を追求するものであったと私は考える。

〔註〕 (1) 俳句研究，昭和9，9月号子規特輯

(2) 同 上

(3) 同 上 柳原極堂の文

子規の資料は全集によったので一々出典はあげず。

引用の子規書簡に句読点を付けなかったのは、明治四十年刊の子規遺稿の中の「子規書簡集上冊」によったためである。